経典傷寒派

経典傷寒派とは、古典を崇拝し、『傷寒論』を遵守するよう主張した流派であり、後世の温病学説を否定し、温病諸派に挑戦状を叩きつけるという形で、清末から中華民国初期の医学界に登場してきた。彼らの発言は非常に過激であったが、当時の医師たちが基礎的な訓練をないがしろにし、枝葉末節や新説ばかりに目を向けるという傾向を是正し、『傷寒論』が外感熱病治療に果たす臨床上の意義を正当に評価するよう積極的に働きかけたという点では、大きな功績を残した。

ところで経典傷寒派と通俗傷寒派とを比較してみると、ともに『傷寒論』を模範とした点では共通しているが、その温病学説に対する態度は、まったく異なっていた。たとえば経典傷寒派が温病学説を排斥したのに対し、通俗傷寒派は温病学説を彼らの臨床実践のなかに取り入れている。ただし『傷寒論』の弁証体系に対する理解の仕方については、経典傷寒派のほうがより深く、啓発に満ちているといえるだろう。

経典傷寒派を代表する人物には、陸九芝（『世補斎医書』）・惲鉄樵（『温病明理』）・祝味菊（『傷寒質難』）・章巨膺（『温熱弁惑』）・謝誦穆（『温病論衡』）などがいる。

学術的特徴

一、温熱派の理論を否定した

温病学説を否定するということが、経典傷寒派の基本思想である。とりわけ葉天士・呉鞠通を代表とする温熱派の学説に対する彼らの攻撃は苛烈を極めた。彼らの考えでは、衛気営血理論や三焦弁証理論、あるいは『温熱論』『温病条弁』の理論の一部は、臨床実践からも経典理論からも遊離しているだけでなく、理論構成においても厳密さに欠けているという。

たとえば祝味菊の考えでは、営衛気血とは、温熱病を誤診あるいは過誤したために起きたいくつかの変証や壊証を葉天士が帰納したものであり、きわめて個人的な経験にすぎず、温病学全体に当てはめることはできないという。それを彼は、つぎのような言葉で批判している。「営衛気血とは、葉天士がよく目にした四種類の病型を分類したものにすぎない。そしてこの四種類の病型分類が生まれた原因は、半分は葉天士が当時の医学の弊害を糾そうとしたためであり、半分は葉天士自身の自惚れの産物である」「葉天士の著書『温熱論』は、病因を探求するための理論ではなく、病変をなぞったものにすぎない。たとえば証候についての叙述をみると、各病変をそのまま描写しているだけである。またその引用している用語は、個人の特殊な思想を表現したものにすぎない」。

また惲鉄樵は、呉鞠通の三焦学説と『内経』の三焦学説を比較し、『温病条弁』の三焦は『内経』の三焦とはまったく別個のものであり、単なる呉鞠通のでっちあげにすぎないので、参考にすることはできないと

批判している。また『温病条弁』では、温邪が口鼻から入って手太陰肺から始まると述べているが、そのような説は根拠がないとも決めつけている。さらに彼は、こうも批判している。「『内経』は凡そ熱病とはみな傷寒の一種であり、邪風が皮毛を傷害することによって始まるといっている。すると、温熱派が口鼻から入り裏から外へ出るといっている温病は、『内経』のいう「熱病」の範疇には入らないことになる」「温邪は口鼻から入るが、鼻は肺に通じているので、温病は手太陰から始まるというのであれば、口は脾に通じているのに、なぜ足太陰からは始まらないのだろうか？」。

謝誦穆によれば、『温熱論』が上から感受するといっている温病とは、流行性感冒や気管支炎、肺炎のたぐいであり、本来温病には入らない。温病に入れるとすれば、それは肺系の温病、あるいは温病の一部にすぎないという。そして温熱派が「温邪は上から受け、まず肺を犯し、心包に逆伝する」という条文を温病の綱領としているのは、まったくの見当はずれであると結論づけている。

また陸九芝らは、温病学説にはあまり価値がなく、温病とは『傷寒論』の陽明病であると断定している。章巨膺も『傷寒論』の条文と各医学者の論述を比較したうえで、つぎのような結論を導き出している。発熱・発汗があり、悪寒せずにかえって悪熱するのは、陽明病である。そして「太陽病、発熱して渇し、悪寒せざるものは温病となす」という記述と照らし合わせれば、結局、温病＝陽明病なのである。また陸九芝も、何人かの温病学家の経験方を分析し、どれも『傷寒論』の陽明病の処方にほかならないと結論づけた。たとえば、楊栗山の温疫方十五方については、「とくに僵蚕・蟬蛻などの穏和な薬味を、黄芩・黄連・石膏・大黄などに加え、楊栗山の新方であるかのようにみせているが、実際には『傷寒』方を使っているにすぎない」と述べている。

このように、温病学者の唱える学説は多いが、いずれも陽明病を名前を変えただけにすぎないとする主張が、彼らの批判の概要である。

経典傷寒派は、温熱派の理論を否定するとともに、『傷寒論』が外感熱病を診断治療するための基礎であること、したがって温病の治療も『傷寒論』の枠を出るものではないことを強調している。たとえば、陸九芝はこのように述べている。「桂枝・麻黄の二味を取り除いてしまえば、『傷寒論』の方剤のほとんどは、温熱病を治療するための方剤になる」「温病の証は『傷寒論』に記載されているが、その処方が記載されているのも『傷寒論』をおいてはない」。また惲鉄樵も「『傷寒論』にもともとある処方のなかで、辛涼剤だけを用い、温薬の入っていないものは、みな温病を治療するための方剤である」と述べている。また祝味菊は『傷寒論』の六経変遷を「五段論」にまとめ、人体工学の側面から外感病を治療するよう主張した。

ところで、経典傷寒派が温病学説を否定したのは、単に学術的な問題を論争するためだけではなかった。当時の中医学界が空論に終始し、臨床から遊離していたことに対する批判でもあった。たとえば惲鉄樵は、このように述べている。「陸九芝は『条弁』『経緯』の誤りを見抜き、温熱各派が経文を利用して世間を幻惑したことに深く憤ってこのようにいったのであり、公平な見解である」。そして惲鉄樵が『温病明理』を著した動機も、ここにあった。「きわめて明瞭な言葉で、しかも的確な理由を示して、この紛糾している状況を一掃し、後学のために解決の筋道を示さなければ、中国医学に進歩革新はない」。また祝味菊も「非現実的で、とりとめのない無駄な議論が、中医学の進歩を遅らせている」と述べ、陸淵雷も「温病学説はきわめて非合理的でまわりくどく、現在に至るまで中医学の進歩を大いに妨げている」と述べている。

二、実効性を重視し、経方の使用を推奨し、軽剤を用いて即効性を追及することに反対した

経典傷寒派は、仲景の精神を遵守し、仲景方を主体として臨床治療を行った。たとえば、葛根芩連湯や白虎湯・麻杏石甘湯・梔子豉湯・承気湯などを温病治療に常用したほか、温病の変証や壊証にも仲景方を活用した。

そして温熱派の新処方に対しては、経典傷寒派は否定的な立場をとっている。たとえば、陸九芝は、『温

病条弁』の増液湯や清宮湯などは、熱を下げることに重きをおかず、陰を救済しようとしている」が、そんなことをすれば「液はたちまち枯渇するし、心包に入り込んだ邪を追い出すこともできない」と批判している。また加減復脈湯や大小定風珠なども、「粘っこい薬は必ず陰を損傷し、邪を引き入れて内陥させてしまう」として退けた。また惲鉄樵も上述の諸方について、「このような粘っこい薬を使うことは実際的でない」と述べている。

そのほかに、当時の医師たちが温病治療に羚羊角や犀角、石斛などを使用することに対しても、彼らは異議を唱えている。なかでも、祝味菊の「軽清」剤に対する攻撃は痛烈で、こう非難している。「軽くて即効性のある処方こそわかりやすく、寒涼剤こそ平穏であるなどというが……成功すれば自分の手柄にし、失敗すれば天命のせいにする。子供だましの医療であり、医者としての責務を全うする資格などない」「医者の使命とは、疾病を除いて生命を保持し、その人を長生きさせることである。技術を高めようとするのを咎めるわけにはいかないが、あれこれと手を広げれば、かえって医学の道を閉ざしてしまうことになる。むしろわれわれは真理を堅持し、現実的な学問を進めていかなければならない。いたずらに人命をもてあそび、手柄をたてようとするものは、医学界の姦賊である」。

代表的人物

一、『傷寒論』を固守した陸九芝

陸九芝は、名を懋修といい、清代末期に活躍した江蘇省元和（呉県）の人である。彼は儒学者から医師となり、『内経』『傷寒論』の研究に専念した。著書には、『世補斎医書』などがあるが、その文章は明解で、当時の風潮を的確に批判しており、含蓄に富んだ作品である。それらの著書のなかで、彼はこのように述べて、秦漢医学を大いに推奨している。「真偽のほどはともかく、『内経』は秦漢時代の著書であるが、どの文章をとってみても、それ自体が治療法になっている。また『傷寒論』は完全であるかどうかはともかく、その治療法は、現代の疾患にも十分適用することができる」「医学を学ぶ[illegible]初は難しいが、後になればむしろ医学が理解しやすくなる。ところが、後世の分類書から始めれば、最初は簡単にみえるが、後で混乱してしまう」。彼の温病学派に対する批判は痛烈だったので、経典傷寒派を代表する人物とみなされるようになった。

彼の考えによれば、「温熱病の治療法は、いずれも『傷寒』理論のなかに見出せる」という。その理由については、このように説明している。「仲景の『傷寒論』にある〝傷寒〟という言葉は、『難経』に〝傷寒に五あり〟とされる〝傷寒〟と同じ意味であり、〝二に傷寒という〟の〝傷寒〟ではない」。また『傷寒論』は、すべての外感熱病を対象としており、冬の傷寒だけを論じた書ではないと、彼は主張している。したがって「『傷寒論』の処方は、寒病治療の元祖かどうかはわからないが、温病治療の元祖であることは明らかであり、『傷寒論』に温病の証が記載されているだけでなく、その治療処方も、まさに『傷寒論』のなかにある」。そこで、「桂枝・麻黄の二味を取り除いてしまえば『傷寒論』の処方の大半は、温熱病を治療するための処方になる」のである。ところが、当時の人々はこれを理解できなかったために、「風寒の治療法は伝承されたが、温熱病の治療法は失われてしまった」といいたてるのである。

さらに陸九芝は、このようにも指摘している。「温病とは、陽明病である」「陽明から始まる疾患は温病であり、太陽から始まって陽明に入るものも温病である」。そして、温熱病に関する学説は多く、しかも独創的であるが、その経証は、いずれもが陽明に置き換えることができるとして、彼はこう主張している。「喩